

地球の表層にあたる地殻や上部マントルは地質学的時間スケールでみると、きわめてダイナミックに水平移動をしている。大陸は分裂して移動し、また集まって別の大陸をつくる。大洋底も火山島や海山を乗せて移動する。海溝は移動する大洋底が大陸またはその縁にある島弧とぶつかり、その下に沈み込んでゆく場所である。地震や火山活動はこの大洋底の沈み込みによって引き起こされる。大洋底を構成する海洋地殻は沈み込んでゆくが、その上に乗った軽い遠洋性堆積物や突出した火山島や海山は沈み込まずに、海洋地殻からはぎとられバラバラになって、海溝に堆積している陸源堆積物と混合する。この混合物は海溝内側に押し付けられてそこに集積してゆく。この混合物は大陸や島弧に新たに付け加わったものということで付加体と呼ばれる。海洋地殻の沈み込みが続くと混合物の集積が進み、付加体は次第に成長して大きくなり、ついには押し上げられて陸上に現れて大陸や島弧の一部となり、その面積を増やすことになる。日本列島の骨組みはこのような

付加体で構成されている。三億年前、飛驒山地はアジア大陸の縁でその南東縁に海溝があり、南から海洋地殻が沈み込んでいて、付加体が順次南に向かって形成され、それが陸化して現在の日本列島の骨組みが形成されたと考えられる。海溝は海洋地殻というベルトコンベヤーで運ばれてきた遠洋性堆積物や海山といういわばゴミの「はきだめ」場というところができ、日本列島は過去の「はきだめ」場というわけである。

地殻・岩石の変形様式
—日本列島はきだめ説からコンニャク石まで—

鈴木博之

紀伊半島南部・四国南部・九州南部にかけて地質学者が四万十帯と呼んでいる地域は、日本列島で最も新しい付加体であり、筆者は大学院生以来、紀伊半島を中心にこの付加体の構造発達史の研究に取り組んで

いる。四万十帯は歴史が新しいだけに付加体としての特徴がよく残されていて、過去の付加体の典型例として世界的にも注目されている。付加体の形成様式についての大枠の理解はされているが、その詳細についてはまだよく解明されていない。特に付加体の最大の特徴である陸源堆積物と海洋性岩石の混合過程や変形様式については不明な点が多い。海溝堆積物がまだ未固結の段階から変形が始まり、これに固結後の変形、さらには付加体深部での高い圧力条件での変形が重なり、従来の地質学ではしられないような複雑な地質構造や変形構造がみられる。付加体の形成をつうじて大陸地殻は発達すると考えられるので、その形成様式や変形様式の理解は地殻発達史研究に大きく貢献するものと考えられる。

このような付加体の変形様式を理解するには、多様な岩石物性についての研究が必要である。その研究の中で最近コンニャク石なるものに興味をもち、その変形様式の研究を進めている。コンニャク石とは名前にやや誇張があるが、岩石でありながらく

「私の研究」

ネクネとよく曲がることで有名な珍しい岩石である。正式な学名はイタコルマイトというが、これは古く一八一七年にブラジルのダイアモンド産地ミナス・ゼライス州のイタコルミ山で発見されたことに由来する。イタコルマイトの産地はきわめて限られていて、他にインドのハリアナ州の一カ所、北米のアパラチア山地東麓の数カ所からしか現在まで知られていない。いずれの産地でも一〇億年以上前のプレカンブリア時代といわれる時代の石英質砂岩ないしは珪岩層の一部から産出する。当初はダイアモンドと関係あるものとして注目されたが、無関係とわかってからはその特異な曲がりやすさ、撓曲性が研究対象となった。一九世紀後半にかなり研究されたが、その後新しい研究はほとんどない。

イタコルマイトの薄片を顕微鏡でみると、ほとんど石英粒子だけからなる多結晶体であることがわかる。個々の石英粒子は非常に不規則な形をしており、ある石英粒子の出っばり部には隣の石英粒子のへっこみ部が対応するといったように、粒子同士

がよくかみ合っている。しかも、各粒子の間には一様な狭い隙間が存在する。イタコルマイトの特徴は、この石英粒子のかみ合い組織と特に一様な隙間の存在にある。これは走査型電子顕微鏡で観察すると更によくわかり、幅数ミクロン程度の隙間が存在する。普通の固い岩石では隙間は連続せず、孤立して散在する。

イタコルマイトを常温で破壊させると、破壊の前後に周波数・振幅ともに小さい非常に多数の微小破壊音が測定され、硬い岩石の微小破壊音とは大きく特徴が異なる。このような特徴からイタコルマイトの組織と撓曲性は、隙間のあるジクソーパズルをモデルとして説明できる。隙間の分だけ各粒子は運動可能で、かつ隙間があつても各粒子はかみ合っているの、バラバラにならないで岩塊として存在しうるのである。

イタコルマイトのかみ合い組織は、丸い砂粒子が堆積後上位層の荷重で、圧力溶解作用を受けて形成されると考えられる。一様な隙間の成因はまだよくわからないが、

粒子境界にもともと粘土鉱物などがあつて、それが地下水などに溶解し運び去られたのであろう。

イタコルマイトはよく曲がるが、少し力を加えれば簡単に割れてしまう。イタコルマイトそのものは珍しいだけで、あまり実用になりそうには思えない。しかし、石英ではなく、もつと硬い材料たとえばセラミックスで同様な組織をつくり、このような撓曲性を示すものができれば、この新しい材料はセラミックスの強度・耐熱性・耐食性と金属のしなやかさを合わせもつこととなり、多様な用途が考えられるのである。

(大学工学部助教授)

A. Pincus と A. Minahan は、その著 *Social Work Practice: Model and Method* (F. E. Peacock Publishers, 1973, pp. 9-20) において、ソーシャルワーク実践の目的とそれを達成するための機能について次のように述べている。すなわち、①人びとの問題解決能力、対抗能力を高めるために、その能力をより効果的に活用できるように援助すること。②人びとと資源、サービス、機会を提供している諸システムとのあいだの相互作用を容易にしたり、修正したり、新しい関係をつくりあげていくこと。それらは、ソーシャルワーク実践の共通基盤として合意を得ている事項である。ソーシャルワーク実践のひとつの方法としてのケースワークにおいても、こうした特質を充分ふまえて、文化論的な視点から「日本的」ケースワーク研究を推進しようとするとき、そこでは、第一には、クライエントの主体的な問題解決的な対抗様式としての自己治療力の存在について（援助のためにクライエントの個人的な強さと資質を活用すること）、第二には、彼の文化体系的な

かにある援助資源の積極的な活用について、特に留意すべきであろう。

ところで、周知のように、それぞれの民族では、生活上の諸困難に対して、それぞれ固有にさまざまな「意味づけ」を日常的に行い、その日常的

文化論を導入した「日本的」ケースワーク研究の方法と課題
—特に伝承的なものとの関係をめぐって—

宮本 義信

に行い、その日常的

的な「意味づけ」

が直接的、間接的

あるいは潜在的に

関連しあうなか

で、その文化独自

の原因論が構成さ

れる。そしてその

原因論に基づいて

社会的、文化的に

固有の援助技法

（あるいは救済の

論理）が組み立て

られる。それを換言すれば、生活上の諸困

難を解決するための原理と方法は、われわ

れの日常的な生活過程のなかに含まれてい

るということである。こうした「援助の日

常性」への視点は、「日本的」ケースワーク

研究の推進にとつての基点である。それを飛び越え、いきなり人間中心主義のパラダイムに準拠して、近代的個人やヒューマニズム、あるいは理性とか基本的な人権というような概念装置でもってクライエントに対応することは決してできない。

今日の「人間成熟の意味の喪失」という時代状況のもとで、人びとが自己実現をはたしていく方向に自身の生涯を切り開いていくところの人生の指針と、日本の地域社会に一般的にみられる伝承的なもの—託宣、社寺参詣などの民間宗教者や住民による宗教活動全般、信仰とそれにもなう行事、人の一生なり一年を通じての儀礼や習慣、憑物はらい、病氣平癒と厄除祈願、象徴の意味付与による個人的忠告としての説話等々の救済的な側面が共鳴しあうという現象がみられている。人びとの日常的な生活過程において、こうした伝承的なもの範疇と論理の構造が、さまざまな問題処理の方法として登場してくることは、私自身も含めて日常的に体験することである。「この問題は、社会福祉の現場に携わる者の

「私の研究」

業務の実感として、はるかに大きな重みを感じざるをえない。」という実践家の声もあり、実際それらしばしば援助の動向と深く関係してくる。ところが、こうした、人びとと文化伝承、風俗慣習との相互の接触機会の一層の拡大という極めて日本的な風土に対して、これまで社会福祉方法論が迫ってきたとはいえない。

いうまでもなく、伝承的なものの治療的な側面に対して単に楽観的、好意的であってはならない。すべてのクライエントにとって、伝承的なものの活用が治療的の意味をもつなどとは決していえない。母親との充分な共生関係や絶対的關係の体験を基盤にしてはじめて、家族、イエ、祖先、社会への信頼感が内在化されていく。こうした経過をたどった人たちにとってこそ、内在化されたイエや祖先が、心理的な意味をもつ。あるいは、伝承的な治療体系と近代西欧型の治療体系との間の行き来、使分け、適応的棲分といっても、相手のもっている文化をうまく摂取して自分のなかに血肉化してそしゃく化していくためには、自分に

とつてのいい意味でのルーツがはつきりあるということが前提とされる。また、伝承的なものの活用が、クライエントの逃避や非現実性を反映していることもあるだろう。伝承的なものの問題を醸成し、癒す源泉としての両義性にこそ留意しなければならぬ。

私の関心は、文化全体の中心特性の析出それ自体にあるのではない。私は、こうした文化的な認識をケースワークの技術と方法に転換すること、つまり、ワーカーとクライエントの対面的、対人的、かつ継続的な関係を媒介とした援助の実践の場面で、援助技法として如何に転換していくかというところに焦点をあてている。なぜなら、援助の実践の技術的過程を明らかにすることが、社会福祉方法論の研究にほかならないからである。

私は、現在こうした方向で実証的研究を継続して行っている。具体的には、クライエントが先行世代のもつ文化のなから、どのようにしながらある種の要素を状況的に選択して、それを自己独自の方法でアイ

デンティティの格としていくのかといった、「個人レベルにおける文化的なものの動的な獲得過程」についてのケース・スタディを社会福祉施設・機関の利用者および実践家を対象にして続けている。

クライエントは、文化の搬送媒体や反応有機体でもない限り、単純なひとつの文化的な要素で支配されてはいない。個人は、主体的にかつ個性的に生きようとする状況的、可変的な存在である。主体と文化との臨界面の現象は極めて多面的であり多義的である。それはまたつねに変動するものである。こうした状況的、可変的なクライエントが多元的な性質をもっているのに符節を併せて、文化は個人の内面化過程においても、多元的に再構成化されていく。これらについては、機会を改め詳しく報告したい。

(女子大学家政学部助教授)

ときは貞享・元禄のころ、西鶴の『日本永代蔵』巻一の二「二代目に破る扇の風」は、実直な父親が一代をかけて貯めた二千貫目の銀を、ふとしたきっかけから息子が一気に使い果してしまおうという、いわば二代目の没落譚として良くできた話である。

その父親の儉約ぶりを描いた一節に「今の都に住みながら、四条の橋を東へ渡らず、大宮通りより丹波口の西へゆかず」という件りがある。一見遠回しに見えて、これも充分あからさまに言われている彼の地とは、むろん四条河原の芝居と島原の遊郭のこと。四条の橋といい、大宮通りより丹波口といい、ここを東へ西へと向かう輩の行く先は、聞くだけ野暮というものである。

没落した二代目の父親は、もつたいたなくも王城の地、この京の都に住んでおりながら、当代繁栄の都の花ともいふべき四条河原にも島原にも、ついに近寄ろうとはしなかつた。どちらもお出費のかさむ遊びである。少しでも足を踏み入れていたならば、到底一代で二千貫目は貯まらなかつただろう。それどころか灯にも草履の鼻緒にも、始末

に始末を重ねて、もつばら禁欲に終始したのが父の代の生涯であつた。ところがこの息子ときたら、はじめの内こそ父に劣らぬ儉約家であつたが……と、このあと島原で散財することになるきつかけの描写や、蓄財と散財のコントラストの妙が大変面白いのである

が、それはさて置き、ここで注目したいのは都の花のほうである。

良く言えば花。

しかし、芝居と遊里は当時「二大悪所」といわれるだけあつて、「悪」の名に恥じない誘惑

に満ちていた。ヒストリカル・エスノグラフィーの提唱者、守屋毅氏によれば、嚴密には芝居が「悪所」と呼ばれるのはもう少し時代が下がるのであるが、いま用例にこだわらなければ、うっかりすると身を滅ぼ

四条の橋を東へ渡れば

廣瀬千紗子

す危険と背中合わせの享楽に、ひととき我を忘れる空間として、芝居と遊里は並び称されてよい。しかも両者は、人為的に隔離され限定された空間として都市のなかに組み込まれ、かつその内部は虚構が支配しているという点で、共通するところが多い。そこで、そろそろ「私の研究」の話にはいらないけれども、対象としているのは「二大悪所」の片方の芝居である。しかし現在のように、たとえば「文学」と「演劇」と、さらには「美術」をも縦割りのジャンルに分化してしまった視点で江戸時代の芝居を考えると、たちまち收拾がつかなくなるか、片手落ちになる。芝居はもつと未分化で荒唐無稽、そのかわりに独自の非近代的合理性を備えてジャンルを横断する有機体ではないかと思う。

さて、大風呂敷を広げるのはいいかげんにして足元の現実をみてみると、研究史の若い分野ながら、この二十年程の間に目覚ましく進展したのは資料の整備と公刊である。江戸時代初期から板本が急速に普及したこともあつて、それだけでなく、近世芸文

